評論 明治大正の歌人たち

木俣

評論・明治大正の歌人たち

木俣　修　著

明治書院

木俣　修（きまた・おさむ）
明治39年7月28日，滋賀県に生れる。文学博士。実践女子大学教授・昭和女子大学講師・日本近代文学館常任理事。短歌雑誌『形成』主宰。

主なる著書

歌集『市路の果』『みちのく』『高志』『流砂』『冬暦』『落葉の章』『歯車』『天に群星』『呼べば谺』『去年今年』
研究書・評論集『白秋研究』二巻『近代短歌の諸問題』『人間と短歌』『近代歌人群像』『近代短歌』『明治秀歌』『短歌概説』『近代文学註釈大系・近代短歌』『百人一首の読み方』『わらべ唄歳時記』『実朝物語』『昭和短歌史』『近代短歌の史的展開』『短歌回向』『忘れ得ぬ断章』『短歌の作り方』他十数冊。編集のものに『近代短歌辞典』『万葉集講座』『和歌文学大辞典』『現代作歌用語辞典』『現代文学講座』十巻『現代日本文学大事典』『現代日本文学大年表』その他。

評論・明治大正の歌人たち

4.300円

昭和46年4月10日 印刷
昭和46年4月15日 発行

著者　©木俣　修
東京都杉並区高井戸東2-7-9

発行者　三樹　彰

印刷者　大沢　忠義

発行所　株式会社 明治書院
東京都千代田区神田錦町1の16
電話（294）5336（代）
郵便番号 101
振替 東京 4991 番

大沢印刷・誠光社製本

不許複製

3092-20123-88305

はしがき

昭和三十九年から四十年にかけて、私はそれまでの約十年間にわたる近代短歌に関する著作をまとめて『昭和短歌史』『近代短歌の鑑賞と批評』『近代短歌の史的展開』の三冊として上刊した。そのうち『昭和短歌史』は昭和初頭から、太平洋戦争を経て昭和二十五年あたりに至るまでの史的展望を試みたものであり、『近代短歌の史的展開』は明治・大正・昭和三代にわたる短歌の歴史を概説したもので、これもまた終戦後に至るまでの記述を果たしたものであった。当時まだ昭和の短歌の歴史を究明したものはほとんどなかったので、学界および歌壇から多くの同情ある批評をうけたことであった。そしてそのころから、昭和の短歌の史的な討究がいろいろな人々の手によってなされるようになったように思う。もう一冊の『近代短歌の鑑賞と批評』はいわゆる作品の鑑賞批評の書である。そうした形のものは早くから多く行なわれていたのであるが、私は考えるところあって、鑑賞批評を通じて、また一つの近代短歌の歴史を書こうという態度をとった。これもまた多くの読者を得て、今日に至っているのであるが、この書の巻末記に私は「かえりみると私はここに描いた歌人のほとんどの人たちについて歌人論的な文章、あるいは研究的な文章を一篇以上書いてきている。機会を見てそれらを整理して一本にまとめることにしたい念願をもっている。」ということを記しておいた。果たすとならばその直後すぐにでも果た

すことはできたのだが、そのころすでにもう『大正短歌史』の執筆に入っていたために、その整理のいとまを作ることを怠ってしまった。

それから約五年の歳月が流れて『大正短歌史』もようやく完稿となり、一本として上刊する運びとなった。この際『大正短歌史』と相前後して歌人論風のものも一本にしてはという強いすすめをうけることになったので、自らかつてそのことを公言しておいた手前もあり、それではと思ってまとめたのがこの『評論・明治大正の歌人たち』である。

明治大正の歌人というなかには大正期に世を去った人もあるが、たいていは昭和まで生きた人であるから、厳密にいえば、昭和の年号も加えていうべきであろうが、ともかくも明治に歌人としての出発をとげて、近代短歌の成立の上に何らかの歴史的な意味を加えた人ということに重点をおいて、こうした呼び方をし、もって書名としたのである。

もともと体系的に網羅的に書いた歌人論ではないから、全体にわたっているわけではない。ここにとりあげて論評の対象とした歌人は佐佐木信綱・与謝野晶子・石川啄木・北原白秋・吉井勇・斎藤茂吉・中村憲吉・土屋文明・釈迢空・今井邦子・若山牧水・前田夕暮・窪田空穂・土岐善麿・太田水穂の十五家である。「明治大正の歌人たち」といえばこの他にもあげなければならない歌人はさらにこれに倍するであろう。私はこれ以外の歌人についてもいろいろ書いたものがあるが、この際はこれだけにしぼることにしたのである。これだけでも予想外に尨大になったので、これ以上は一冊に入れることができな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いという理由によるものである。

一人について評伝風に長く書いたものもあり、一人のほんの一傾向について書いた短いものもあるというわけで、統一などは一切できていない。書いた年次、そしてまた書いた目的、あるいは方法みな一篇一篇が違っているのであるから、やむを得ないことである。

評論と号したが、中には解説風なものもあり、随想風のものもある。また例えば白秋のような歌人であり、詩人である人については、その歌人以外のしごとのことにも触れて書いたものも便宜上ここに収録しておくことにした。

総じてさまざまな講座だとか雑誌の作家研究号だとか、あるいは全集の月報だとかに、注文で書いたものであるから、自ら発心して研究したものの成果というわけにはいかない。しかし私はもともと学究の一人として近代短歌史を専攻してきたので、それぞれの中に自分なりに調べたり考えたりしたこともいくらかはこめているつもりである。

既刊の『昭和短歌史』はじめ三冊の著作と、これに相ついで上刊する『大正短歌史』、そして続いて執筆する『明治短歌史』などと表裏をなしているものであることは間違いない。つまり、この書もまた個々の作者を論じながら全体として近代短歌史の水脈というものが何ほどかが描かれているのではないかとひそかに思っている。そういった見方によって読まれるならば著者の光栄この上もないと思っている。ただいろいろな機会に書いたものの集成なるが故に重複した記述があることをことわっておかなけ

ればならない。

なお巻末には二人の小説家の短歌について書いたもの、および明治天皇の御製について書いたものを加えておいた。

おもってみれば私はここ四十数年の長い歳月にわたり短歌作家としての道を歩み続けてきた。作家が文学論を持ち、評論を書くことは当然のことであるが、作家論を書くということは、時と場合によってかなり苦しい立場に立たなければならないことがある。そこに評論を専らとする人と作家にして評論を書くものとの相違がある。しかし私はあえてこの困難を克服しようと努力してきたのであるが、その苦渋はいろいろなところにじんでいるのではないかとも思う。諸家の清鑑を乞い、叱正を待つものである。

昭和四十六年の新春の光を浴びつつ。東京杉並高井戸東、風鳥居にて。

著者しるす

目次

はしがき

I

近代文学と短歌〈序説〉……一

II

佐佐木信綱

『思草』について……二六

与謝野晶子

晶子と新詩社……三四

新詩社結成と鉄幹の詩精神　晶子の登場と歌壇の変貌　意気投合した晶子と鉄幹　一世を風靡した『みだれ髪』　晶子のはたした歴史的意義

晶子と新古今集……五四

新派和歌運動における新詩社の立場　新古今集の浪漫歌風と新詩社の浪漫歌風　晶子と王朝文学

晶子の『みだれ髪』の本質的生命

石川啄木

啄木の生涯とその文学……十三
渋民村　少年期　文学へのめざめ　中学退学と上京　『明星』の新人　詩集『あこがれ』上刊　結婚　渋民の代用教員　北海道の流浪生活　釧路新聞記者として　東京における創作生活　「食ふべき詩」・明治四十二年　『一握の砂』上刊・明治四十三年　『悲しき玩具』『呼子と口笛』　最晩年そして臨終
『悲しき玩具』について……二六
刊行の前後　『一握の砂』と幸徳事件　『悲しき玩具』にみられる生活と思想　短歌史における啄木の位置
啄木私観〈啄木と白秋らとの交渉について〉……一三五

北原白秋

白秋の詩美の秘密……一四二
白秋と外国文学……一五三
はしがき　白秋の蔵書中の外国文学書　『海潮音』と白秋　『桐の花』について　『雲母集』以後　劇中歌のこと　『まざあ・ぐうす』
『明星』脱退半年前の白秋と鉄幹……一八二
白秋歌風の展開……一九二
白秋と万葉集……二一九
白秋の歌謡〈小唄と民謡〉……二三九

吉井　勇
勇の生涯とその文学……二四三
はしがき　生いたち　『明星』に入る　頽廃歌風の先駆　『明星』脱退から『スバル』創刊まで　歌集『酒ほがひ』上刊　歌物語について　『昨日まで』およびそれ以後の歌集　『人間』の創刊　『相聞』創刊前後　人生的転機　『人間経』の世界　第二の人生　戦時下のあけくれ　戦後のしごと　最晩年そして終焉
勇の文献的年譜……二七八
斎藤茂吉
茂吉と白秋〈その初期における交流と乖離の実態〉……三三
はしがき　茂吉と頽唐派　『雲母集』と『あらたま』　『雀の卵』初期と『あらたま』
『赤光』について……三三五
『アララギ』新風の先駆者　泡立つ青春の生命感　初版本について
中村憲吉
憲吉の頽唐的傾向……三四一
土屋文明
文明の生涯とその文学……三四八
少年期　伊藤左千夫にめぐり会うまで　『アララギ』の蕩揺期と文明　左千夫の死　処女歌集

『ふゆくさ』　『往還集』と現実歌風　『山谷集』と『アララギ』主導力の変化　『六月風』の時代　『少安集』と文明の戦争対処の問題　太平洋戦争の開始と文明　中国の戦地視察と『韮菁集』　疎開生活と『山下水』そして『自流泉』　『青南集』『続青南集』の時代

釈　迢　空

迢空の若き日の歌―そのヒューマンな匂いの源流― ……四一四

今　井　邦　子

邦子の歌集とその歌風の展開……四二〇

はしがき　『姿見日記』　『片々』　『光を慕ひつつ』　『紫草』　『明日香路』　『こぼれ梅』　『今井邦子拾遺歌集』

若　山　牧　水

牧水の人と作品……四四八

牧水の恋愛歌……四五三

牧水の歌論……四五五

前　田　夕　暮

夕暮の生涯とその文学……四六二

近代短歌史における前田夕暮―序説―　少年期　投書家時代の歌　車前草社　白日社と『向日葵』　夕暮と自然主義―明治四十一、二年―　『収穫』　夕暮と牧水　『詩歌』創刊　『陰影』の自然主義的傾向　後期印象派的歌風への展開―『生くる日に』―　『深林』について　『詩

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

歌』の休刊　沈黙期から復活まで―『原生林』時代―　「天地更新の歌」　夕暮と白秋　『日光』の創刊　『日光』時代の作品　『詩歌』再刊　自由律短歌への転機　短歌的重量感説　『水源地帯』　内在律短歌　定型復帰　その晩年　結語

窪田空穂

空穂の人と作品……五三三
処女歌集『まひる野』のあとさき……五三六
空穂論〈浪漫的出発より生活環境詠への到達まで〉……五四〇

土岐善麿

歌人土岐善麿……五四八
哀果時代の善麿……五五八
『NAKIWARAI』　『黄昏に』　『不平なく』『佇みて』『街上不平』『雑音の中』

太田水穂

太田水穂について……五七二
水穂の短歌の諸問題……五七六

芥川龍之介の短歌……五八七
中河与一の短歌……六〇一

Ⅳ

明治天皇—作歌十万首の歌人……六一五
天皇御集の改編　作歌の御修業　御作歌の実際　日露戦争を中心として　流派を超えて
あとがき……六三一

近代文学と短歌〈序章〉

一

「近代文学と短歌」というテーマについて考えていくのにはいろいろな方法と方向があろうと思うが、ここでは近代文学の展開に添うて、千二百年の古い伝統を負うている短歌がどのような様相を示し、それ自体が近代文学の一ジャンルとしてどのような展開をしてきたかということを考えてみることにしたいと思う。

近代の成立がいつであるかということ、近代とは何かということなどについての論議は従来多くの人々によってやかましく行なわれているが、いまは封建的なものから開放されて、人間性というものを重んじ、自我を確立しようとする意識のようやく明らかになった明治二十年ごろを近代の成立した年代とみなして、そこから出発することにしたい。

明治十八年には坪内逍遙の『小説神髄』『当世書生気質』が出ている。前者においては小説構成における馬琴風の勧善懲悪的なモラルを排して、人情をありのままに写実せよという主張がかかげられていて、人間が尊重されなければならないという考え方が提示されたのである。そして自ら逍遙はその理論の裏付けとして『当世書生気質』を書いたのである。次で二葉亭四迷は『小説神髄』の立場をさらに徹底させて十九年『小説総論』を書き「写実主義」(リアリズム)を説き、その実践として二十年『浮雲』を書いた。

こうして小説の近代化は着々として遂げられていくわけであるが、明治二十年における短歌の世界はどのようなものであったのか。

二

明治二十年という年は短歌の世界でも『国学和歌改良論』というものが出た。萩野由之が『東洋学会雑誌』に「小言」という題名によって書いたものをのち小中村義象の国学に関する改良論と合わせて一本としたものである。

それまでの短歌の歩みというものは、一言にしていうならば近世期の和歌そのままの継承でしかなかった。堂上派・桂園派・古典派・民間派など諸流派が対立していたが、堂上派・桂園派などはともに古今集を典範として、その固定的な風雅の美意識の繋縛から一歩も出ることのない非個性的な作風に終始していたし、古典派も、擬古に身をやつすことを専らとしていた。民間派には若干新風が見られないこともなかったが、それとても微弱なもので、総じて新しい時代の風潮とはほとんど関りのないものであったといってよい。

その間、文明開化の波をかぶって十年以降数年間にわたって開化新題和歌というものがしきりに行なわれ、「開化」を冠した詞華集が続々と出たが、それは例えば、

むしめがねかけておもへば人の目はさやかに物の見えずぞありける（顕微鏡）
おしなべてたかきいやしきけだ物の毛をいただかぬ人なかりけり（シャッポウ）
しかすがにわすれもはてぬみくにぶり箸ほしげなる人もみえけり（西洋料理）

—明治一四年刊・佐々木弘綱『開化新題和歌梯』—

といったようなもので、文明開化にともなってもたらされた新事物、新風俗などを「新題」とした題詠であって、そこからかもしだされた近代性などというものはほとんどなかったのである。

さて由之の和歌改良論であるが、これとても、もともと史学者である由之が、古典学の改良を考えて、その手始めとして和歌改良をしようとしてなした論で、実作者がその内面的な欲求によって考えたというようなものではなかった。

彼は旧来の和歌の陳腐な病弊を歌詞・歌題・歌格・歌調・歌材などの多方面にわたって衝いて、その改良修正を提唱しているわけであるが、それはあくまで、和歌そのものの中にくぐまった考え方であって、さきの『小説神髄』その他の論に見られるような、人間問題などとは無関係なものであった。

しかしこの和歌改良論を一つの起点として、新派和歌運動というものが漸次さかんに行なわれるようになったことは争うことのできない事実である。新派和歌運動が「新派」を号するからには「旧派」と違ったところがなくてはならないわけである。その違いはどこにあったのか。

旧派の弊風の最たるものは題詠である。新派はまずその題詠主義を自由題主義に切りかえるべきであることを主張した。自らの欲する実景実情に立って歌うべしとしたのである。したがって歌題の選択も自由であって、花鳥風月式な美意識の制約を解かなければならぬとした。さらに用語あるいは歌調・歌格といったものも、従来雅語と俗語を厳しく区別して、雅語意識（和歌ことば）を強調したり、制詞を作って用語の制限をしたりしていた因襲から脱して、すべて自由なことば、自由な調子で歌うべしとした。

要するに旧派が特定の階級の人々の風流韻事としてもてあそんでいた和歌を、誰でもが自由に制作することのできる文学として解放しようとしたところに新派和歌運動の理想があったといってよい。呼称の上においても和歌という呼びかた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com